

総合教育会議記録

1. 日時

令和4年1月26日（水曜日）

午後3時58分開会、午後4時56分 閉会

2. 場所

条里南庁舎会議室

3. 出席者

横手市長 高橋 ^{だい}大

横手市教育委員会

教育長 伊藤 孝俊

教育委員 加賀谷 長吉

教育委員 二階堂 ^{まもる}衛

教育委員 今仲 和代

教育委員 佐々木 雅子

4. 説明のため出席した者

総務企画部次長兼総務課長 佐藤 ^{しん}信

教育総務部長 木村 雅美

教育指導部長 岩野 玲子

教育総務部次長兼教育総務課長 菊地 浩昭

生涯学習課長 横井 ^{あきら} 朗

スポーツ振興課長 加藤 ^{さだすみ} 貞純

文化財保護課長 佐藤 孝之

図書館課長 高橋 秀明

教育指導課長 西村 ^{なおたか} 直崇

学校教育課長 川津 久和

学校給食課長 岩瀬 司

5. 事務局

総務課上席副主幹 ^{おだしま} 小田嶋 あけみ

教育総務課上席副主幹 樽川 ^{ともみ} 朝美

教育総務課副主幹 大友 ^{たかのり} 幸憲

教育総務課主査 最上 拓弥

6. 会議に付した事件

(1) 令和4年度教育行政方針(案)について

(2) その他

7. 会議の経過と結果

開会 午後3時58分

●木村教育総務部長

お疲れ様です。若干早いですが、皆さんお集まりなので、早速始めさせていただきます。

それでは、ただ今より、令和3年度第1回横手市総合教育会議を開催する。この総合教育会議は、平成27年の地方教育行政法の改正に伴い、設置が規定されたもので、市長と教育委員会により構成されるものである。例年、この会議において、次年度の教育行政方針についてご意見を頂戴し、まとめている。終了時間は、午後5時を想定しているので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。開会にあたり、市長からご挨拶をいただく。

●高橋市長

お疲れ様です。1回目の総合教育会議ということで、ご参加の皆様には教育行政全般にわたり、推進にご尽力いただいていること、またご指導賜っていること、この場をお借りし、深く感謝申し上げます。

そもそも私どもの市長部局と教育委員会とは、相互理解の下、しっかり連携をしながら進めていくべきであり、今後も想いを共有しながら、しっかり前に進めていくべく、このような会議が設けられているものと思う。今抱えている問題、課題を共有して、政策に取り込んでいきたいと願うばかりである。

このようにコロナでもって、世の中の、国民の、市民の気持ちも揺

らいだり、振り回されたりしている昨今だが、教育委員会の皆様におかれては、毅然と今起こっている事象に立ち向かい、適正に対応していただいていること、心から感謝申し上げる次第である。かつて子宮頸がんワクチン云々で、いろいろと問題が取り沙汰されたが、同じワクチンでありながらも、今回のコロナにおいては「やれ、やれ（やりなさい、やりなさい）」というようなことで、マスコミ、世論は節操がない訳だが、そういう節操がない、いろいろな動きにも、流れに乗ったり、逆らったり、流れを読んだり、とにかく船が難破しないように、そういった流れにもうまく対処しながら、我々は節操ある行動をできるだけ保てるように、ということが大事なのだろーと思っっている。ついては、そういった市民が、地域の人たちが、みんなでやればどんな困難にもしっかりと立ち向かえる、そういった強い地域になると思っっているので、特にこれから厳しい世の中を生きていく子どもたちにおいては、こういった世の中にありながらも、文明の利器もしっかり自分の力にしながら、技にしながら、また、強い心を持ちながら、そして正しい知識もどんどん貪欲にのみ込みながら、育っただきたいと願う次第である。今後とも協力して、横手市の発展に資する人材を育成するために尽くしてまいりたいと思うので、何卒よろしくお願い申し上げ、開会にあたってのあいさつに代えさせていただく。どうぞよろしくお願い申し上げます。

●木村教育総務部長

ありがとうございました。続いて、教育長からご挨拶をいただく。

●伊藤教育長

皆様お疲れ様です。さきほどの教育委員会から引き続いての総合教育会議ということで、よろしくお願ひしたいと思う。

教育方針についてご協議いただく内容になっているが、教育委員会サイドだけの方針の検討ということになると、場合によっては偏りがあったり、独りよがりの部分が出てきたりということもあろうかと心配されるところだが、市長部局、とりわけ代表である市長のご出席も得ながら、このようなことについて話し合う機会があるということは、大変いい機会だろうと捉えている。市長部局の想ひ、また、市長のご指導もいただきながら、横手市にとっての教育行政の在り方、方向性を再確認するいい機会として捉えたいと考えている。今日は市長の気持ちも十分ご指導いただきながら、忌憚のないご意見を、教育委員の皆様からもいただき、方針の精査をしてまいりたいと思う。皆さん、よろしくお願ひ申し上げる。

(1) 令和4年度教育行政方針(案)について

●菊地教育総務部次長兼教育総務課長

昨年度策定した教育ビジョンを基に、ビジョンに沿った事業を展開していくにあたり、毎年、教育行政方針について、主な実施事業をま

とめている。この教育行政方針は、このあと市の政策会議を経て、横手市議会3月定例会において説明するものである。

【以下、〔議題（１）資料〕を基に説明】

●木村教育総務部長

ただ今ご説明した、令和4年度の方針について、教育委員会としては、このように進めたいと考えているが、皆様のご意見を伺いたいと思う。ご協議をよろしくお願い申し上げます。教育委員の皆様には、今回はじめてお示ししているので、ご意見があればと思う。

●佐々木教育委員

令和4年度の方針は、前年度と比べると、纏まって、スッキリとした方針になっていると感じた。大きな事業は、例えば、学校にタブレット配置とか、学校の施設整備とか、そういった事業が消化されてなくなってきたのだなと。今回、もちろん令和4年度において、新しい事業も並んでいるが、大きな山を1つ超えて、令和4年度はそれを充実させていく年でもあるのかなと、この方針を見て感じた。

4ページの「不登校適応対策といじめの早期発見・早期解消」で、「不登校児童生徒については、」のくだりだが、今までになく、児童生徒について、下段のほうで寄り添い方が具体的に示されており、これまでの方針に加えて、さらに1つ進んだというような印象を受けた。

●木村教育総務部長

ありがとうございます。いろいろな機器もそろえていただいたので、佐々木委員がおっしゃるとおり、今後は活用等も検討していきたいと思っている。

●二階堂教育委員

全体通してだが、大変よくできた教育行政方針だと、率直にそう思った。これを元に進めていかれる訳だが、であれば、どのように発信していくのか。どのような方法をして、市民によりよく理解していただくのか。そういうやり方を、これからもっともっと考えていかなければいけないのではないのかな、という印象も持っている。1つの事業を行って、それがニュースとして報道される。また、ニュース番組でなくても、今月はこういうものがあると紹介されるようなテレビ番組もあろうかと思う。そういうところに、もっともっとアプローチして、横手市ではこういうことをやっているというものを、横手市民だけでなく、全県^か下に知らせるやり方も、これからもっと考えていかなければいけないのではないか。せっかくこういう立派な土壌というものがあるので、それをもっと生かすことを、もっともっと考えて、実行していかなければいけないのではないかな、という印象もあわせて持った。

●木村教育総務部長

昨年度、大変多くの予算をつけていただき整備されているので、ご

意見として承る。

●加賀谷教育委員

本当にスッキリした教育行政方針だな、という第一印象である。細かい話になって恐縮だが、８ページに縷々並べている、見るスポーツばかりでなく、合宿のような、技術に触れ、感動するような部分が、もうちょっとあってもよかったのかな、という気がしている。

●木村教育総務部長

ありがとうございます。

●今仲教育委員

私も教育行政方針は、非常にスッキリした感じで、わかりやすかった。１３ページの、小中学校の全児童・生徒に「よこてだいすき」のテキストを、令和４年度からはタブレット上で活用できる、ということである。私事だが、私の子どもの高校で、自分の住んでいるまちのいいところを紹介する宿題があった。その時に「よこてだいすき」を見た他の地域の生徒さんや、同級生、先生から「横手市ってすごいね。こんないいものあるんだね」と褒められて、とてもうれしかったと言っていった。すばらしいものを作ってください、感謝している。

●木村教育総務部長

ありがとうございます。教育委員の皆様から、いろいろご指摘をいただいたり、ご意見をいただいたりしているが、市長のご意見をいた

だければと思う。

●市長

教育委員の皆様から、お褒めの言葉と受け止めている。これをしつかり具現化し、行動に移していくということで、大いに教職員の皆様方、生涯学習担当の皆様の奮闘を期待するところである。タブレットについては、先に行く生徒たちに追い付く形で、教員の方の活用指導をがんばっていただきたいと思うし、情報機器を扱うテクニックが、子どもたちは食欲に受け止めるのだろうが、やはり情報リテラシーという部分と、心・技・体でいうと「心」の部分こそ、指導者が力を発揮するところで、扱い方や操作の運用の仕方は日進月歩で、それについていくのは、子どもたちのほうが順応性が高いはずなので、師匠として教えるのは、そうじゃない部分だと思う。「なんでそういう考えなの？」の「なんで」の部分で、こういうリスクがある、こういう問題があるからと、分かりやすい表現で伝えていくことが大事なのかなと。失敗させて、その失敗を教訓に、という方法もあるのだろうが、取り返しのつかない経験、教訓は、させるべきでないと思うので、いろんな事例とか、年代に合わせた分かりやすさというものを、ぜひ伝えてもらいたいと思う。

また、特別支援の部分は、親御さんの理解が年々深まっているが、未だにご理解いただけない親御さんもいらっしゃるだろうし、そうい

う子どもたちを担当される支援員の皆さんには「本当にご苦労様です」と思う。その苦労されている姿というのは、保護者は知らないかもしれないし、忍耐強い対応はわからないかもしれないが、何らかの形で、そういうことも伝える術はないかなと思ったりもしている。これは横手市だけで解決する問題でなく、県や国の機関の現場の理解とか、今の対応の延長線上だけで、果たしていいのかとも思う。今はたぶん、努力と根性と忍耐が乗り越える術だが、それでいいのかなという部分では、いろいろと挙げるべき問題はあるのだと思うし、解決しがたいけれど、解決すべきヒントも、もしかしたら国・県はわからないのかもしれない。現場なりの表現があぶり出されれば、非常にいいのかなと思う。

また、不登校、いじめについても、必ずどの時代にあっても課題なのだろうが、大人が見て見えるいじめと、大人が見れないいじめと、大人が見られないいじめのほうで、深刻度が強いと思うし、それはメディアリテラシーの部分にもつながるだろうが、目に見える形のいじめられ方をしていないと、もしかしたら別の方法でと。いじめる側も工夫を凝らすので、バレないように最善を尽くすだろうから、そこらへんは目を凝らして気を付けて。それを眺めている同級生とか、友達がいると思うので、そういう子どもたちが伝えやすい部分も。今までやっていらっしゃるだろうが、今後も期待する。せっかく揃えたハ

ードがあるので、遺憾なく発揮していただいて、今後も発展を期待する。

●木村教育総務部長

市長からお話があったが、委員の方から何かお話しされたいことはあるか。

●市長

いじめとはまた違うかもしれないが、優秀であっても打たれ弱い。うちの職員でも出現している。そこはしなり強さというか、たくましさ求められる。いつの時代も、いくら文明の利器が発達して、いろんなものが楽になっても、その時代なりの困難だったり、苦痛なり、何なり耐えないといけない、しのがないといけない部分というのは、形を変えて、いろんな場面に発生する時、多少「なにくそ」とか、皮肉も激励と受け止められるというか、叱咤激励の「叱咤」を、ドストレートに受け止めて、心が立ち直れないという。なので、まわりは、腫れ物に触るように扱わないといけない。優しい横手市の市民の中では、腫れ物に触るように扱っていただいて過ごせるだろうが、他の世界に行ったら厳しいものだ。助けてももらえないという時に、ただ打ちひしがれて、廃人のようになって戻って来られてもと思うので、どのようなご時世であっても乗り越えられるたくましさというのは、子どもたちには身に着けてもらいたい。

●木村教育総務部長

市長からいじめの問題として提起されているが、委員の皆様から何かお考えがあれば。

●二階堂教育委員

市長から、いじめに関してのお話をいただいているが、いつになっても、いじめというものはなくなる。特効薬的なものがないということで、いじめられた側に、どのようなケアができるのか。不登校につながるのであれば「かがやき」だとか、そちらのほうで、そういうケアになる部分は、一生懸命、横手市教育委員会としても、これまでがんばってこられた訳だが、考えようによっては、もちろんいじめ根絶、ゼロというのは、まず不可能に近いものではあるが、これからはいじめた側、また、それを傍観している側に対する教育を、もっともっと考えていかなければいけないのではないかなと、別の観点で言えばだが。他国で言えば、カウンセリングを受けるのは、いじめられた側ではなく、いじめた側というお話もだいぶ前に聞いたと記憶している。であれば、そういういじめた側をカウンセリングする。また、それを傍観している人も、どういう気持ちでそうになっているのか、ということの調査が必要だと思う。そういう教育に関しても、もっと目を向けていけたら、今よりももう少しよくなるのではないのかなという思いはある。そのへんを、これから教育委員会として考えていただ

ければということである。

●木村教育総務部長

ありがとうございます。この問題について、皆さん何か感じていることはあるか。

●加賀谷教育委員

この間のニュースでもあった、電車の中での暴行事件で、土下座して謝った。謝ったという表現がいいかわからないが、まわりで友達なり何なりがいた中で、止められなかったということ。その前には、電車の中での殺人事件とか。マスコミの取り上げ方もワンサイド的な部分が…。要するに、マスコミで取り上げた部分だけが起きているというような形の報道の仕方というのも、問題があるのかなという気がするが、やはり止めきれなかった周りにいる子どもたちの考え方というか、そういうのを、ここの生徒たちにも、どういうふうな考え方を持っているのか聞いてみたい気もしている。

●木村教育総務部長

今仲委員は、お子さんが今、学校に通われているが、何か感じることはあるか。

●今仲教育委員

いじめられている子も大変辛いし、いじめているほうも何かしら悩みなどがあったりして、いじめているつもりはないんだけど、必

要以上にいじめてくるのかという感じがする。二階堂委員がおっしゃるとおり、いじている側の教育、カウンセリングが…。こうしたら嫌なんだよ、ということを教えていかないと。取り巻く子たちも、その子に逆らえば、自分もいじめられると思うのかかわからないが、それで「ダメだよ」と勇気を出して言えなくて、見ているだけという。なんと表現してよいかわからないが、難しい問題だ。

●木村教育総務部長

佐々木委員何かあるか。

●佐々木教育委員

永遠の課題だ。いじめる人も、いじめられる人も自分の世界をもっと大きくしていかないと、見る目が育ってこない。感じる心が育っていかない。1+1が2である、ということが分かる子が、いじめるとダメ、いじめられても誰にも言えない、というような心でいけば、人としての両輪の片輪しか育っていかないということなので、両輪を育てることは親でも大変だが、雑ばくでもいいから、もっと大きな心の、高いところから広いところ、見える子どもに、やはり育っていかないといけないのかなと。起きたことに対して、言ったり、教えたりすることはできるが、起きないようにすることが前提だと思うので、とにかくだっ広い心の子を育てていけたらと思う。抽象的で申し訳ない。

●伊藤教育長

問題が問題だと言って悩んでいてもしょうがない訳で。例えば、不登校は社会的な現象の1つとして、これは無くなるという次元の問題ではなく、存在するという前提の下で、その子をどう生かしたらいいかということを、行政としてできること、学校としてできることを考えないと、頭の中で不登校とはなんぞやということを、いくら考えても解決にはならない。不登校問題で、おそらく一番大事なのは、原因を探ることももちろん必要だが、一般の子と同じように学習する、体験するという機会を、どうやって与えてあげるかというところが、我々行政の、司るほうの非常に大事な視点だろうと思う。そういったものを、施策として具体的に構築をしていく。そのことで、不登校の子どもたちが、少しでも前に進めるようにしていくことが必要で、いじめ問題についても、いじめる側、いじめられた側ともに、様々な問題を抱えているということだけは確かな訳で、どちらのサイドにとっても、バックボーンにあたる闇の部分で、なんとか引っ張り上げて、大人の知恵、学校の知恵、行政の知恵で、少しでも前に進むように手助けをしていく。そのために、具体的にどうするかという、我々の動きを考えていかないと、机の上の話では、これからは済まないだろうと思う。そういった視点で、教育委員会としては、教育委員、市長のご指導の下、具体的にどうするかということを考えられる教育委員会の

動きでありたいと思っている。そういう意味で、令和4年度は動きのある年度にしていきたいと思うので、よろしくお願いしたいと思う。

●木村教育総務部長

ありがとうございます。教育委員会でも不登校、いじめ問題、今のご意見をいただいたことを肝に銘じて取り組んでいきたいと思っている。他には何か、皆さん日頃お気づきになっていることがあれば。

●市長

蒸し返すようだが、いじめ問題や不登校はケースバイケースで、背景も、その子の性格も、置かれている環境も違っていて、しかもその都度、事象を発見したときに、オーダーメイド対応なのだと思う。この方法で対処すればすべていい、という処方箋はなかなかない。ある程度こういった傾向、ああいった傾向という分類ができて、たぶんその場、その場での人間力が試される対応なのだと思う。先生も、そればかりに時間を割いてられない訳で、なんとかそういう事案が発生したときに、そこにある程度気が回せるような。要は余計な仕事というものの軽減がないと、やはり特別支援の子の対応とか、その親に対する対応とか、人間の対応とか、学問を子どもたちに広く教えるという作業以外の部分のストレスが多いのではないかな。ふだん1年間で教えるカリキュラムは、先生方の頭の中に入っているだろうから、その都度、その時間が来たらこれを教えるという形でいいのだろうが、

学校生活と家庭とのやりとりに、頭のほとんどが奪われている。奪われるのはやむを得ないにしても、なるべく余計な仕事の軽減というのは、改善、改良が出来ているのか。その点どうなのかと思う。余計な仕事はないだろうが、全部大事な仕事なのだろうけれども。

●伊藤教育長

比重で考えると、家庭への対応は、とりわけ小学校は大変苦慮している事態が増えている。中学校ももちろんある訳だが、我々教育委員会で、校長会、教員等に話をしているのは、一人に対応するとストレスが倍増、3倍等かかる。それを学校全体で、チームとして取り組めば軽減につながる。どうしても教員は、孤立しがちな発想の持ち主が多いので、市役所職員とその点、若干違うが、市役所職員は、どちらかというところ、チームで動くのが比較的得意である。そういった部分を改善するように、学校には求めている。市としても、支援員など、バックアップする体制の人材を、学校にできるだけ送り込むように、鋭意努力をしている。県教委の絡む事業についても、できるだけ手を挙げて、人材を投入することについては、一生懸命頑張りながらやっているところである。チームで難儀なところを分散しながら、また、親にとっても、いつも同じ学担の話はもうダメなので、様々な世代の、様々な感覚の先生方と親が触れ合えるような、そういう算段をしながらやるように、今、努めているところである。かつては、学担が一人

で40人を相手に、平気でやれる学担もいたが、最近そういう形でやるようにしている。

●木村教育総務部長

他にあれば。よろしいか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

ありがとうございました。今いただいたご意見を参考にし、修正を重ねながら成案をつくっていきたいと考えているので、よろしくお願い申し上げます。

(2) その他

●木村教育総務部長

その他、何かご意見あれば伺いたいと思う。

●二階堂教育委員

コロナ禍の中での会議でもあるし、いろいろあれをやりたい、これをやりたいという話も数多くある訳だが、制約がある中での行政のことであるので、粛々とがんばっていただきたいと思っている。

●木村教育総務部長

ありがとうございます。他に委員の皆さんからないか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

ありがとうございました。それでは、以上をもって、令和3年度第

1 回横手市総合教育会議を終了する。

閉 会 午後4時56分